乳用牛の舌に発生した繊維肉腫の一例

佐藤 司* 斉藤一秋 伊豆 肇 小玉 肇 鈴木敏規
斉藤幸夫¹⁾ 小松 茂¹⁾

NOSAI 秋田 中央部家畜診療所

1) NOSAI 秋田 家畜臨床研修所

A case of fibrosarcoma occurred in tongue in dairy cattle

T. Satoh*, K. Saitoh, H. Izu, H. Kodama, T. Suzuki, S. Saitoh, S. Komatsu
Akita Veterinary Clinical Training Center

.....東北家畜臨床研誌 22 (1): 29-31, 1999

.....Tohoku J. Vet. Clin. 22 (1): 29-31, 1999

はじめに

我々の日常の診療の中で腫瘍はたびたび遭遇する疾患の一つであるが、口腔内の腫瘍、特に舌の腫瘍についての発生報告は極めて希である。

今回、ホルスタイン種乳用牛の舌に発生した繊維肉腫の症例に遭遇したので報告する。

材料および方法

症例は管内に飼養されているホルスタイン種乳用牛で、平成5年2月2日生まれ、発病当時5歳で妊娠4ヶ月齢、産歴は3産であった。

平成10年1月頃より常に流涎が認められるとのことで、同年2月17日初診した。初診時、片手開口器による簡易口腔内検査にて異常は認められず、イソジン液による口腔内洗浄を指示し経過観察した。同年3月、症状が続いていたので再度口腔内検査を実施したところ、舌隆起前方に50×30mmの腫瘍が確認された。同年4月に至り採食量低下、徐々に消瘦、流涎量増加、腫瘍増殖が著しく、腫瘍表面に化膿や出血が認められるようになり手術不能と判断、予後不良と診断し同年4月23日廃用とした。

検査材料は、4月21日に採取した血液と食肉衛生検査所において採取した腫瘍を含む舌および周囲リンパ節とし、血液については当臨床研修所に於いて血液および血液生化学的検査を行い、病理組織学的検査は管内家畜保健衛生所に於いて実施した。また、腫瘍組織を家畜衛生試験場病理診断研究室へ送付し、電子顕微鏡による鑑別診断も実施した。

成 績

1) 血液検査所見

平成10年4月21日の血液および血液生化学的検査所見では全項目ほぼ正常範囲内にあったが、ヘモグラムでは好中球が13%と減少し、リンパ球が80%と増加していた。アルブミンは2.79 g/dlと減少しA/G比も0.51と低下していた(表1)。

2) 肉眼所見

腫瘍は舌隆起前部に50×70×60mmの大きさで実質内へ浸潤性に増殖し、硬い結合組織の固まりのような触感を呈していた(写真1)。腫瘍表面は潰瘍が形成され、腫瘍実質が表面に露出し分葉状となり、一部化膿巣も認めら

Received : 15 March 1999 / Accepted : 3 June 1999

*Correspondence to : Tsukasa Satoh, Akita Veterinary Clinical Training Center, Honjo 015-0011, Japan. (〒015-0011 秋田県本荘市石脇字山の神 11-609 TEL : 0184-24-5881)

れた。

3) 組織学的所見

腫瘍領域では紡錘形腫瘍細胞の不規則な束状増殖が観察された。腫瘍細胞の異型性は高く核の両端はやや尖っており、核分裂増が多く観察された(写真2、3)。潰瘍表層では化膿性病変が重度で、好中球を主体とする細胞浸潤が見られ、腫瘍細胞間にも好中球浸潤が認められた。アザン染色では腫瘍細胞間に青色に染まる膠原繊維が豊富に存在していた。PTAH染色により腫瘍細胞の細胞質に横紋は観察されなかった。

近位リンパ節である左顎下リンパ節、耳下リンパ節および咽頭後リンパ節のリンパ洞および被膜において腫瘍の転移像が観察された(写真6)。

4) 電子顕微鏡所見

腫瘍細胞の核の周囲に多量の腫瘍細胞と、拡張して空胞化する粗面小胞体を有する繊維芽細胞が認められた(写真4、5)。

表1. 血液検査所見

RBC	629	$10^4/\text{cm}^3$
WBC	5600	$10^3/\text{cm}^3$
GOT	72	U/l
BUN	14.8	mg/dl
Ca	8.0	mg/dl
IP	4.8	mg/dl
T-CHO.	170	mg/dl
CPK	137	IU/l
TP	8.26	g/dl
Alb.	2.79	g/dl
A/G	0.51	

平成9年4月21日検査

考察およびまとめ

繊維肉腫は繊維芽細胞が存在するところであれば何処でも発生すると言われているが〔1〕、牛の口腔内、特に舌に発生した例は極めて希であり、我々の調査でも報告例を検索することはできなかった。

繊維肉腫の発生原因についてはネコ、マウス、ニワトリ等ではC型RNAウイルスが原因であるとされているが、イヌ、ウマ、ウシでは不明である〔1〕。

(写真2)

(写真3)

(写真1)

(写真4)

(写真5)

(写真6)

繊維肉腫の鑑別診断は、HE染色標本では困難なことが多く、平滑筋肉腫、横紋筋肉腫、悪性神経鞘腫、脂肪肉腫等との類症鑑別のためvan Gieson染色、Azan-Mallory染色、PTAH染色、銀染色などの特殊染色による診断あるいは電子顕微鏡などによる詳細な検査が必須とされている〔1、2、7〕。この症例においてもわれわれはHE染色のみでは横紋筋肉腫との鑑別ができず、特殊染色としてAzan-Mallory染色、PTAH染色を行い、さらに家畜衛生試験場病理診断研究室において電子顕微鏡による検査を行った結果、横紋筋肉腫は否定され繊維肉腫と診断されたものである。

繊維肉腫は浸潤性が強く、脈管性に主として肺や肝臓あるいは所属および遠隔のリンパ節に転移するとされている〔1、7〕。今回の症例では、と畜場での剖検であったため腹腔内臓器の検査はできなかったが、近位リンパ節である左顎下リンパ節、耳下リンパ節、咽頭後リンパ節において転移病巣が認められ、悪性腫瘍の特徴を裏付ける所見であると思われる。繊維肉腫の治療は外科的切除が一般的であるが、その性質上再発することが多いとされる〔1〕。今回の症例のように発生部位が舌であり、しかも比較的増殖速度も速く、腫瘍組織が舌周囲全般におよぶ場合は手術の適応症となり難く、抗腫瘍薬の使用や抗腫瘍ワクチンの開発〔4～6〕などを含めた、治療方法についての検討が今後の課題と思われる。

謝 辞

稿を終えるにあたり、ご協力くださいました家畜衛生試験場病理診断研究室の皆様、秋田県中央家畜保健衛生所の小川先生、そしてNOSAI秋田中央部家畜診療所ならびに家畜臨床研修所の皆様に心から感謝申し上げます。

引用文献

1. 飯島宗影、影山圭三、石川栄世、組織病理アストラ (1983). 文光堂. 東京.
2. 獣医学大辞典 (1989). PP.856. チクサン出版社. 東京.
3. 大橋和彦、(1998). 獣畜新報 51 : 593-598.
4. 尾崎博、西村亮平 (1997). 獣畜新報 50 : 977-981.
5. 尾崎博、西村亮平 (1998). 獣畜新報 51 : 65-68.
6. 尾崎博、西村亮平 (1998). 獣畜新報 51 : 161-164.
7. 竹内啓、獣医臨床腫瘍学 (1985). pp.174-175. 学窓社. 東京.